

家田 莊子

Shoko Ieda

惚れたら
あかん

大阪ヤクザ、恋愛中！



光文社文庫

長編小説

惚れたらあかん ほ 大阪ヤクザ、恋愛中！ おおさか れんあいちゆう

著者 いえだ しようこ 家田 莊子

2003年 8月20日 初版 1刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印刷 萩 原 印 刷
製本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Shōko Ieda 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73536-3 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編小説

惚れたらあかん

大阪ヤクザ、恋愛中！

いえ だ しょう こ
家田 莊子



光 文 社

惚れたらあかん

大阪ヤクザ、恋愛中！

「え？ 石橋さんが、大阪の本店に転勤？」

小田真夏^{まなつ}は、思わずティカップから、ミルクティをこぼしそうになった。

「まだ内示の段階だがな。まあ、じきに石橋が、真夏^{おまえ}に言ってくるだろ」

土曜日というのに、珍しく接待ゴルフに出かけない父親、真一が、何でもないことのような言い方をして、トーストをかじっている。ゴルフに行かないのにゴルフウェアを着ているのは、ビジネススーツ以外には、ゴルフウェアしか持っていないからだ。

東京の下町、もんじゃ街・月島^{つきしま}の二階建てボロ家に住む西和銀行銀座支店長宅は、一カ月に一回ぐらい偶発的に、家族全員が食卓に集まることがある。地元で友人と共同経営している喫茶店が電気工事とかで休業のため、母親、三和^{さわ}は、髪にカーラーを巻いたまま、コーヒを煎^いれているし、高校デビューをした弟、真^{まこと}は、遊びに忙しいはずなのに超金欠で、どこへも行けないでいる。土曜日の午後二時。小田家の居間は、テレビと有線放送をつけた上

に、みんな口々に喋るしゃべるので、ガチャガチャ、まるでバーゲンセール会場のようだ。そんな中で真夏が、父親のつぶやきのような声をキャッチできたのは、驚異の技だった。

「明日、デートなんだ、石橋さんと」

真夏は、長い睫毛まつげを、パチクリさせながら、レーズンパンにバターを塗っている。

「聞いてないぞ、そんなこと」

父親は、眼鏡の奥の細い目を光らせた。いかにも銀行員という品行方正な顔立ちをしている。

「いいじゃん。石橋さん、全然、手え出して来ないから」

「手え出して来たら、えらいことだ」

父親が声を上げたちょうどその時、玄関の呼び鈴が鳴った。

「あ、ナナだ」

真夏は、確かめもせず、そう言うのと、玄関の方へと逃げて行つた。

「真夏！ 待ちなさい。こらっ」

「あなた！ そんなことで怒つたつて、真夏も二十一なんだから、少し放つとした方がいいのよ。石橋さんも、お父さんのこと気にして、手え出さないんだし」

「出したら、クビだ！」

三和の言葉を奪うようにして、父親が不機嫌極まりない表情で言った。石橋左京さきょうというのは、かの有名な丁大を卒業して西和銀行に好成績で入行後、エリート街道まっしぐらの青年で、現在、真夏の父親の部下でもある。小田家に遊びに来た時から二人は、うるさい父親の監視の下、肉体関係のない交際を二ヵ月続けて来た。が、今一步、真夏が恋に突入できないのは、石橋の隠しきれないお家柄と、すごい財産のせいだった。

「で、真夏はどうした？」

父親が玄関の方をチロチロと気にしながらも、まったく気にしないフリをして、三和に尋ねた。三和は、真夏の食器をさっさと片付けながら、

「あら、おかしいわね。ナナちゃんと玄関で立ち話でもしているのかしら」

一向に気にせず言った。植林うえはやしナナというのは、真夏の高校時代からの親友である。

「呼んで来なさい。おい、三和。道端でキャーキャー男の話でもやられたら、近所に顔向けできん」

「判りましたよ。ナナちゃ——ん。ナナちゃ——ん？」

三和は「よいしょ」と言っ立ち上がると、かったるそうに玄関の方へと歩いて行った。

「まなつ——う。まなつ——？」

その声は、三軒先にでも、充分通じるほど、澄んだ大きな声だった。

「まったく、ナナちゃんとやらも、知らないわけじゃないし、ちよつと挨拶^{あいさつ}に来たつていいじゃないか」

イライラカリカリしている父親の横で、

「もう、いやしねえよ。合コンに行くつて言つてたもん」

黙々とパンをかじりながら、つぶやく真の声は、誰の耳にも、届いていなかった。

「なんか、あの坊っちゃん、ずいぶん真夏に、やさしいじゃん？」

植林ナナは、小さな目でウインクしながら、今、真夏のために一生懸命水割りを作つてやつてゐる東三田^{ひがしみた}芸大三^{あこ}年の塚田星次^{せいじ}を顎^{あご}でしゃくつた。ナナの同級生が開いた合コンに、ちやつかり真夏も参加させてもらつてゐるのだ。真夏たちにとって、やりたくなつた時に、やる男をゲットすることは簡単だったが、彼氏を見つけるということは大学でAを取ることより難しかった。

六本木にあるカラオケルームは、土曜日とあつて、超満員状態。あちこちの個室で、合コンらしきカラオケパーティが、ギューギュー詰めで開かれていた。

「真夏つて、K大なんだつて？　いくらエスカレーター組でも、あつたまいんだあ」

星次が水割りを二つ持つて、真夏とナナの席の間に、むりやり割り込んで来て坐^{すわ}つた。

「そりゃ、東三田芸大は、頭はないけど、お金だけは持つてるって子の救世主大学だもんね」

そっぽを向いて、ほおづえ 頬杖をついたナナが、わざと聞こえる声で言っても、カラオケの音が大きすぎて、星次には、まったく聞こえていない。

「だから、ウチなんか万年貧乏。星次くんが羨ましくって。お父様、田舎でたくさんラブホテル経営してるんですって？ すっごーい」

二十歳をすぎたら、「よいしょ」も、真夏の口から、自然と流れ出るようになった。

「いいなあ、六本木の億ションに住んじやって……。ウチなんか、いくら中央区にあっても、ボロ家……」

真夏は、豊かな胸の前で両手の指を組み、「祈りのポーズ」をしながら、夢見るように言った。

「つれてってやるよ」

星次は、枝毛の多いセミロングの茶髪を掻き上げながら、大きな目玉をギョロリと回転させた。

「ねえ、真夏。彼氏いるの？」

「いたら、合コンなんか来ないじゃん」

と言ってしまったから、石橋の理知的な顔が一瞬、浮かんだが、真夏はこの際、気にしないことにした。

「じゃあ、星次くんは？」

真夏と、ナナが、申し合わせたように同時に、星次の顔を覗き込んだ。

「い、いないさあ。いたら、合コンなんか、来ないじゃん」

星次は、背筋を伸ばして、交互に、忙しく真夏とナナの顔を見やつてから、スクツと立ち上がり、

「あ、俺、次」

マイク台のある方へと、逃げるように行ってしまった。

「ねえ、どう思う？」

と、ナナがお尻を横にずらして、真夏にくつついて来る。

「ん……。クエスチョンマークがついたわね、これで。でも、あんなバカ坊っちゃん、もてるわけないと思うんだけど……」

「いや。もてるわよ。お金目当ての尻軽女は、いっぱい寄ってくる」

「やけに自信持って言うわね、ナナ」

「だって、ウチの父ちゃん、十代の女相手に援助交際ばっかしてるもん」

「うーん。そうか……」

真夏は、大納得のうなりを上げた。ナナの父親というのは、大手テレビ局でドラマ制作のプロデューサーをしており、大の女好きだった。

「とにかく、観察。チェック、第一。いい？　今夜は絶対、やっちゃダメ。いくら誘われてもね」

「もちろんだけど……」

真夏は自信なさげに、星次の方へ視線を向けた。星次は尾崎豊の「アイ・ラブ・ユー」を、自己陶醉して熱唱している最中だった。

「恋人、欲しいなあ……」

そうつぶやくと真夏は、

「ちよっと、トイレ……」

思い出したように突然、立ち上がり、カラオケ個室から出て行った。

「あ———っ」

全館カラオケ個室のビルから出た途端、真夏は、小さな顔じゅうを口にして、大声を張り上げた。六本木通りの歩道を歩いていた夜遊び族が、一斉にその声の方を向いた。

「ヤッベ……」

マクドナルドの前でしゃがみ込んでいた五人のストリートボーイたちの中から一人が、後ろに飛び上がって尻もちをついた。

「真——っ！」

真夏が猛スピードで、駆けてくる。

「ヤベツ……。ねえちゃんだ」

真は起き上がると、あたふたと、四つんばいになって逃げようとした。が、真のブルゾン
は、すでに真夏の手につか
まれている。

「ねえちゃん」

真は、喉のどに筋が立つほど壮絶な顔をして、見飽きた顔を見た。

「なにしてるの？ 六本木で」

真夏は、真の腕を掴まえ、引っぱり上げた。ストリートボーイ仲間も「ヒューヒュー」言
いながら立ち上がり、好奇心満々の目で二人の方へ近づいて来た。

「だ、だからあ。近くのデイスコで、コギヤルパーティー打ってた（やってた）もんで……」

小田家で一番、冷静沈着というか、無関心、無感動、つまり、不感症の真が、目の玉を忙
しく上下左右に動かしながら、しどろもどろで言った。

「嘘!!」
うそ

「へん。真夏は遊んでばっかで、ちつとも家にいないくせに、姉き面づらすんなよ」

「真夏?! お姉様に向かつて、それってある?」

真夏は、仁王立ちして怒ってから、ふっと真の手の方に目をやった。真の左手が、やたらと背中の方へ隠れたがっている。

「真、何持ってるの?」

「ドキッ」

真は総毛立った。

「ちよいい見せてよ」

と言うより早く、真夏は真の左手首を掴んでいた。

「やめろってば! やめろ」

「見せなさいよお」

真は、左手をグツと握ったまま、腕を振り廻し、真夏の手を振り払おうとした。

「何にもないってば」

真の腕が振られる度に、真夏の小さな体があつちに振り廻されたり、こつちに振り廻されたりする。二人は、ハアハアと息遣い荒く、齒を剥むき出しにしながら、格闘を続けた。

「放せよお」

「見せなさいってば！」

真夏は、ムキになって叫ぶと、真の手の甲に長い自分の爪を立てた。

「ギエーッ」

真は、左手を右手で庇^{かば}いながら飛び上がった。

「いってえ、いってえ、いってえってば!!」

「なに? これ」

真夏は、真の左手の中からこぼれ出た錠剤一個を不思議そうに眺めた。

「知らねえの? 今時。真の姉ちゃんって、かわいいよなあ」

茶髪の高校生たちが、ニタニタと半ばバカにした眼差しで真夏を見やりながら、ダボパンツのポケットに両手をつ込み、近づいて来た。

「エクスタシーっちゅうんだよ、真の姉ちゃん」

「え——っ? エクスタシ——っ」

「し……」

真が、大あわてで真夏の大きな口に飛びついた。

「あっ……」

ポロリと真夏の手からこぼれたエクスタシーが、歩道の上をコロコロところがっていく。

「あ、もったいない」

真とストリートボーイたちが、毛玉のようになって、脱兎のごとく、エクスタシーの後を追った。

「よう、お前ら。邪魔やのお。道端で運動会なんかしよって。通れへんやないか」

その低くて聞き慣れない西の日本語は、ゴチャゴチャやっている真夏やストリートボーイ軍団たちのすぐ後ろから、雷のように突然、落ちて来た。背筋に寒いものを感じて、棒立ちになった二人が、恐る恐るゆっくりと振り返ると、

「親分の邪魔や。はよ、そこどかんかい」

グレイ地のダブルのスーツを着たスキンヘッドの男が、軍団の中を掻き分けるようにして、
おおまた 大股で進んで来た。

「ガキは、はよ帰って寝えや」

凜々しいけれども、どこことなく愛嬌のある四十ちよつと前ぐらいの体の大きな男が、爪楊枝を唇の端にくわえながら立っていた。男の頭上には、クラブばかりが入っているビルが、そびえ立っている。どうやら、そこから上機嫌で出て来たらしかった。

「はれ……？」